



久しぶりに

弁護士 長谷川 彰
hasegawa@oike-law.gr.jp

大学生の頃から、趣味を書く欄にはスポーツ以外に必ず「歌舞伎鑑賞」と書くくらい、歌舞伎を観るのは好きだ。しかし、このところ仕事が忙しくてなかなか歌舞伎を観る機会がなかった。ところが、先日母が金融機関の敬老サービスで、六世中村歌右衛門一年祭と2代目中村魁春襲名披露と銘打った5月大歌舞伎のチケットを割安で手に入れ、私もお相伴させてもらった。成駒屋は、明治以後の最も優れた女形といってよいだろう。股関節脱臼のため、舞台の外では跛行しておられたが、いざ舞台へ上がると微塵もそれと感じさせない演技力であった。道成寺や籠釣瓶、先代萩の政岡などが印象深い。凛とした気品のある演技であった。

私は、先斗町に生まれ、中学3年までかの地で育ち、自宅の向かいが長唄の師匠の家であったことから、6歳の時から長唄の三味線を習い始め、中3の頃まで習っていたので、邦楽には親和感がある。何となく耳に心地よいのだ。ただ、その後は全く稽古から遠ざかり、今では弾けなくなってしまった。深尾先生が今でもピアノを続けられ、リサイタルまで開かれるというのは、途中でやめてしまった私などからすれば、ただただ尊敬するばかりである。

さて、今回の演目は、新作ものの「狐と笛吹」（北條秀司作）、常磐津の「年増」、時代物の「金閣寺」、長唄の「鷺娘」の4本。中村松江改め魁春は、金閣寺の雪姫を演じている。雪姫は、本朝二十四孝の八重垣姫、鎌倉三代記の時姫とともに三姫と呼ばれ、歌舞伎のお姫様役のなかでも難役とされている。魁春は昼の部でも八重垣姫を演じている。いずれも、成駒屋の当たり役である。

雪姫は、雪舟の孫という設定で、雪舟が涙で描いた鼠が生きて、雪舟を縛っていた縄を食い切るとい

う逸話があるが、雪姫は散った桜の花びらを足でかき集めて鼠を描き、見事鼠が現れて姫を縛った縄を食い切るというのがクライマックスにある。歌舞伎の時代物は荒唐無稽な話だが、この桜の花びらが大量に降るシーンは実に美しかった。また、吉右衛門演じる松永大膳と雁治郎演じる真柴久吉が、一旦刀を抜き合いながら、決着は戦場でつけようと言って大団円を迎える歌舞伎独特の終わり方は実におおらかだ。

しかし、なんといってもこの日の私のお目当ては終幕の玉三郎の鷺娘である。幕開け綿帽子の花嫁衣装姿で登場すると、まるで一羽の白鷺が天から舞い降りた風情である。前半は長唄の軽快なリズムに乗って、町娘の恋の遊びが表現される。引き抜きも数回あり、VISUAL的にも楽しめた。

後半の壮絶な地獄の責めから娘が息絶えるまでの玉三郎の舞は、名手藤舎名生の笛の調べと相まって、幻想的な世界へと観るものを誘い込む。いつのまにやら、玉三郎が玉三郎ではなく、鷺の精そのものになってしまう。ある批評家は今回の玉三郎の舞台を観て、最期に玉三郎が舞台中央で動かなくなったとき、玉三郎の肉体から抜け出た鷺の精が天空へ飛んでいくのが見えたと言っていた。

幕が下りてからも余韻を楽しむためにしばらくは灯りがともされなかった。母も感動し、しばらくボーとしていた。私自身も、しばし仕事の憂さを忘れ、夢の世界に遊んだひとときであった。